

# 逆光を過ぐ女の子

紫 李鳥

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

逆光の朝日を浴びた桜が幻想的だった。その光景に見とれていると、ランドセルを背負った女の子が横切った。

# 目次

逆光を過ぐ女の子

1



# 逆光を過ぐ女の子

紘子の家は、土手に沿った一本道が見える場所にあつた。二階の寢室からは朝日を、もう一方の窓からは夕日を堪能することができる。春には桜が土手を彩り、花見客で賑わう。

それは、満開の桜が花びらを散らす頃だつた。いつもの時間に起きると窓のカーテンを開けた。朝日を浴びた桜のシルエツトが幻想的だつた。

……きれい。

その光景に見とれていると、不意に目の前を人影が横切つた。それは、ランドセルを背負つた女の子に見えた。何か重いものでもランドセルに入れているのか、前屈みで通りすぎた。

……こんな早い時間に登校？

そんなふうに見えるながら、食事を作るために一階に降りた。――

「ね、夕飯、何がいい？」

トーストにマーガリンを塗りながら訊いた。

「ん？……たまには魚にするか。肉が多かったから」

ベーコンエッグを食べながら、絃子をチラツと見た。

「魚ね……煮魚でも作ろうかな」

中華ドレッシングのサラダを口に運んだ。

「ああ、頼むよ」

トーストをかじった。

夫が出勤すると洗濯機を回しながら、掃除をした。ベランダで洗濯物を干している時だった。固定電話が鳴った。

電話を寄越したのは、自治会長の奥さんだった。

「奥さん、ご存じでした？泥棒の件」

「泥棒？いいえ」

「うちの前にある高級マンションに泥棒が入ったのよ」

「まあ……」

「指輪やネックレスをどつさり盗まれたんですって。ま、ある所にはあるのね。一つぐらいお裾分けしてほしいわ。オホホ」

「で、捕まったんですか？」

「まだみたいよ。奥さんもお気をつけあそばせ」

「うちには目ぼしいものはありませんから、大丈夫です」

「ま、ご冗談を。オホホ。それじゃ」

「わざわざご連絡いただきありがとうございます」

泥棒か……気を付けないと。

戸締まりを確認して、昼前にスーパーに行った。アジが安かったので、南蛮漬けにでもしようと思い、玉ねぎとピーマンも買った。

帰宅すると、昼食のナポリタンを作り、テレビを点けた。

「——足立区のマンションに窃盗が入り、指輪やネックレスなど、1000万円相当の貴金属や時計が盗まれました。被害に遭った住人の話では、アイマスクと耳栓をつけて寝る習慣があったため、窃盗には気づかなかつたとのことですが、先ほど、不審者を目撃したという人の通報によって犯人が逮捕されました。逮捕されたのは窃盗の常習犯で、前科があるとのこと。警察は、さらに余罪があるとみて調べを進めています。」

通報したのは、朝6時ごろ荒川の土手を散歩していた人で、情報によりまずと、最初、ランドセルを背負った女の子に見えたそうです」

……朝6時、荒川、土手、ランドセル、女の子？えっ！私が見たランドセルの女の子？

「ベンチに座り、何かキラキラ輝くものを手にして、ニヤニヤしていたので不審に思い、桜の木に隠れてスマートフォンで撮影したとのこと。その映像がこちらです」

テレビに映し出されたのは、スクエアリユックを背負ったおかつぱ頭の老婆だった。